

不妊治療の終結に苦悩する患者への支援  
～二人の生活をテーマに行った患者会の報告～

森分純子<sup>1)</sup> 小松原千暁<sup>1)</sup> 福田愛作<sup>1)</sup> 森本義晴<sup>2)</sup>

1) IVF 大阪クリニック 2) HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】

不妊治療のその先をどのように考えていいかわからない、治療のやめどきがわからない、誰にも相談できない、という患者の声から、「二人の生活」をテーマに患者会を開催した。患者会を通して、不妊治療の終結に苦悩する患者が求める看護介入について検討した。

【方法】

2018年6月と2019年6月に患者会を開催した。患者会では、二人の生活を選択されたご夫婦の体験談を聞き、その後グループディスカッションを行った。患者会に参加した30名を対象として、参加の動機、会の感想、会に参加後の気持ちの変化、などについてアンケート調査を実施した。アンケートは個人情報保護の観点から無記名、患者に与える心理的影響を考え任意参加で実施した。

【結果】

30名(100%)の回収が得られ、35歳以上が28名(93%)を占めた。満足度調査では26名(86%)が「とても満足」と回答した。参加の動機は、「内容に興味があった」「体験談を聞いたかった」「患者同士で話をしたかった」等であった。参加した感想は、「同じ思いの方が多くて心強くなった」「普段不妊の話をしないので、少し気分が晴れた」等であった。気持ちの変化については、「選択肢は一つではない、自分の価値は子どもがいなくても変わらないと思えた」「気持ちが揺れてもいいと思えた」「治療を続けながら、二人の生活について夫と話そうと思った」等の回答が得られた。

【結論】

患者会を通して、不妊治療中の患者は孤独で、誰かに気持ちを伝え共有したい思いは強いが、現実には、治療について話せない、話せる場がないことがわかった。

看護師は、不妊治療について孤独である患者の思いに寄り添い、声掛けや傾聴の姿勢で、患者がいつでも話せる環境を整え、また話せる場があることを発信していく必要性を痛感した。今後も患者が求める情報を発信するとともに、心の重荷が少しでも軽減できる患者会を工夫し定期的に開催していきたい。